

3-8. 全体構想の見直し

自然再生の取り組みは順応的管理の考え方を取り入れて進めることから、全体構想を定期的に見直す機会をもうけましょう。

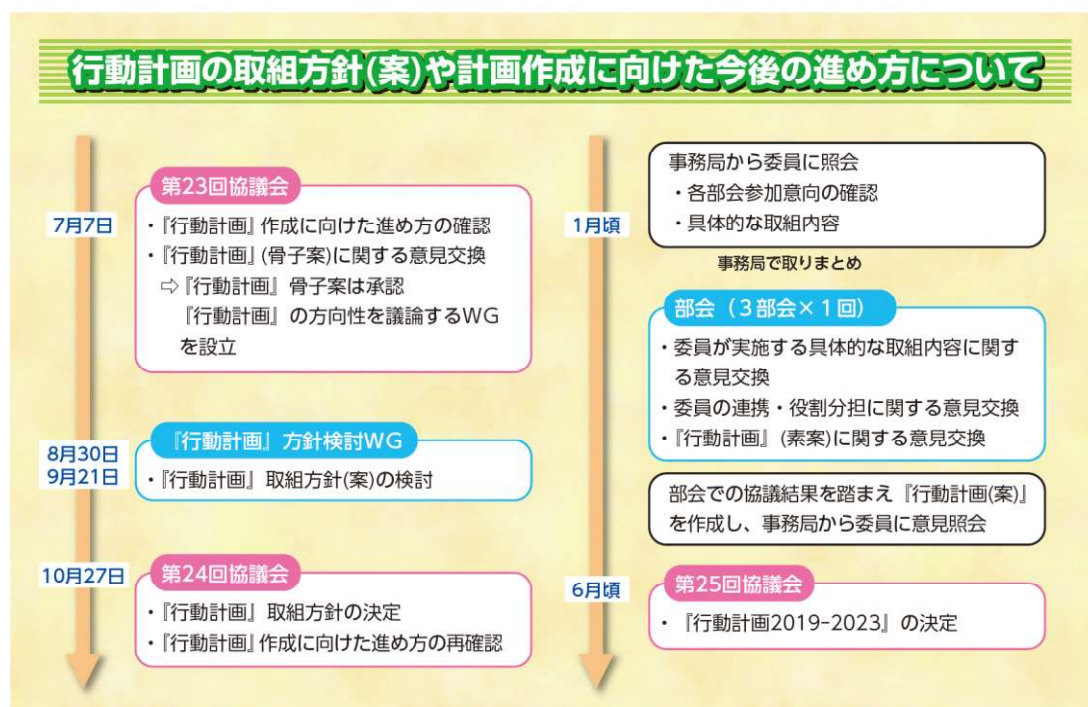
解説

全体構想策定後、年月が経過すると、情勢等の変化により見直しや新たな視点が生じてくることも多くなります。また、10年、20年と全体構想の見直しをしていないと、見直し作業に対する抵抗感が生じてきます。

国の基本方針は5年に1回見直しており、基本方針見直しのタイミングにあわせて協議会の全体構想を見直すことで、効率的に全体構想の内容が社会の潮流に遅れていないかを確認することができます。実施計画の見直しとあわせることでも合理的に見直しができます。

理念を変えるのは大変な労力を伴いますし、大きく変わるものではないため、見直しにあたっては、現況の次点更新や、新たな視点の追加（SDGs、地域循環共生圏、森里川海プロジェクト等）、これまでの活動の成果と課題の追加等を行うことが考えられます。

変更ありきではなく、確認するだけでも見直すに越したことはありません。



行動計画の作成スケジュール例
(石西礁湖自然再生協議会)

15年以上自然再生協議会を続けて思うこと

神於山（このやま）での取り組みは、1999年から始まり、2003年に協議会が設立され、2004年に全体構想、2005年に実施計画を策定するという駆け足での始まりでした。

一つの市域での取り組みで15年以上続いているのは

・対象が里山で“人がかかわることによって成り立つ自然ということ”で、取り組み方がわかりやすいこと

・市の郊外にありアクセスが良いこと

・自主的、主体的に参加しやすい仕組みがあること

・市がボランティアを育成し、維持・管理活動を協働で行ったり、その後の活動を支援し多様な参加や体験活動が行われていること

・活動を通じて、愛着や思い入れを持つようになったこと

などが考えられます。日常の活動も“手作り感”が強く、立派な施設などはありませんが、全体で年間総活動日数は約300日、活動延べ人数は約3,000人の数がボランティアで維持・管理活動に参加しています。保安林事業で行った放置竹林等の整備は、その後雑木林や管理竹林となり、シイタケや炭焼きにも利用され、ササユリ・キンラン・ギンランそしてオオムラサキが復活し、フクロウも営巣するようになりました。不法投棄や放置されて暗くて汚い山から、ハイキング・自然観察など多くの方が訪れる山となりました。一方で個人所有地等に全く手が入らず、より一層荒れた場所も残ってしまっています。また団体ごとで担当エリアを分けており、交流の機会も少なく、山全体としての取り組みが課題となっています。

また今後の課題は次世代へのバトンタッチです。体験活動やボランティア講座を開催していますが、現状維持といったところです。

改めて里山の魅力と役割を特に若い世代や若いファミリー層に向けて様々な手段で発信していきたいと思います。

神於山保全活用推進協議会 NPO法人神於山保全くらぶ
理事・事務局長 田口 雅士



体験活動「道づくり」
「すごい！道になってる」の声



台風で傾いたクリの木を起こす